

＝文学コンクール作品講評＝ 牧野節子

「ねばねば」。魅力あふれる作品でした。

創作文の最終候補に残ったのはほとんどが長編でしたが、そのなかで、この短編は異彩を放っていました。

ある日、ねばねばがやってきて、女の子の家にホームステイして、やがて去っていくという、ストーリーとしてはそれだけの話です。

そのねばねばについても、お風呂の場面で、「濡れすぎると溶けてしまったりする」などと書いてはありますが、形状の描写はありません。

作者は、あえて、彼の姿を描かなかったのでしょうか。それとももしかしたら、彼のビジュアルイメージを、作者自身がはっきりととらえてはいなかったのかもしれませんが。

しかしいずれにしろ、その「描かなかった」ことで、「ねばねば」は作品として成功しています。「書きすぎていない良さ」があるのです。

エドワード・ゴーリーという絵物語作家の描いた『うろんな客』という絵本があります。

ある家に得体の知れないへんてこな生きものがやってきて、そのまま棲みついてしまう。お皿を食べたり、本を破いたり、勝手気ままな行動をくり返し、家族は困ってしまうのだが、追い出そうとはしない。奴がやってきた日から十七年経ったいまも…というお話です。

絵本ですから生きものの姿は描いてありますが、生きものの名前や、奴がいったいなにものであるかは、いっさい明かされていません。読み手の想像に委ねられているのです。

その絵本を初めて読んだときと同種の感動を、私は「ねばねば」から受けました。

読み手が想像する余白を残す書き方。作品から醸し出されるユーモア。ねばねばの、とぼけた、ちょっとぬるめの、愛すべきキャラクター。彼とふれあう登場人物たちの人柄。ねばねばや人物たちの生き生きとした会話。あたたかくて、ちょっぴりせつない読後感。

そういったものすべてに心ひかれました。

作者はそれらのことをねらって書いたわけではなく、なんとなく書いていたらおもしろいものができあがってしまった、ということなのかもしれません。そんなふう感じさせる、肩に力が入っていない書き方にも好感をもちました。

この作品を読んだ人たちの頭のなかに、それぞれ違った「ねばねば像」が結ばれるのだろうなと思うと、なんだか楽しくなります。

「DEAD OR ALIVE」は、読み応えのある作品でした。

「僕」と「あたし」、二人の人物の一人称で、交互に綴られていく物語。

「あたし」を救うため事故にあい、死線をさまよっている「僕」は、ある場所で、「案内人」と称する男から、「三つの問いに正しく答えれば生還できる」と告げられます。

話の設定や展開にいささか無理はあるものの、文章力、描写力があるので、ぐいぐいと読み進むことができました。作者は「書くこと」がほんとうに好きなのだろうなあ…ということがよく伝わってくる作品でした。

しかし、物語の前半に比べ後半は粗いですし、最終章で、それまでの話とは関係のない登場人物が出てくるのもいただけません。この作品を連作として書き繋ぐためのブリッジかもしれませんが、それにしても唐突です。

「書くこと」に酔いしれるのはいいとしても、そのために、自作のちょっとした欠点を見逃してしまうということもあります。常に「醒めた目」を持ち、推敲を重ねましょう。そうすることによって、作品はさらに高められていくはずです。力のある作者だと思いましたので、少々きびしいことを申しました。

今回、入賞作以外にも優れた作品が数編あり、応募作のレベルの向上に驚かされました。

皆さんのなかから、将来、作家が誕生するかもしれません。期待しています。